

東大EMP第5期プログラム 最終報告発表 概要

(2011年5月14日)

チーム・メンバー	課題テーマ	タイトル	概要
<p>[チーム1] 岡 俊男 田倉 聡史 西田 直人 二宮 悦郎 平竹 雅人 松嶋 博孝</p>	<p>健康的で活力のある 超高齢化社会経営</p>	<p>「プラチナ卵がつくる 仕合せ(しあわせ)社会コミュニ ティ」</p>	<p>1. 現状:「人口減少、量から質へのパラダイムシフト」 過去150年間の間に日本の人口は3千万人から1億2千万人へと増加した。一方で今後100年の間に人口は4千万人まで減少する可能性がある。また社会での人工物は飽和し、物質社会から、精神的な満足感を得られる「生活の質の高い社会」への移行が求められている。現在は、人口増大から、減少へのまさに大転換点にあり、超高齢化社会に向けた経済社会構造のパラダイムシフトが必要である。</p> <p>2. ビジョン:「仕合せ社会」 我々は新しい社会のビジョンの提示を試みる。それは「多様性のある自立した個人が、真心と思いやりを持って、お互いに助け合い、仕え合う社会」である。</p> <p>3. 実践方法:「仕合せ社会コミュニティ」の構築 それを実現する為に、「人々の心をつなぎ、社会参加、社会貢献する場を構築する。我々はそれを「仕合せ社会コミュニティ」と名付ける。そのコミュニティで活躍するのは、高齢者の仲間入りをする「団塊の世代」である。時間とお金と人生経験があり元気な団塊の世代は、日本の強みであり、新しい社会構築の担い手となる。「金の卵」と呼ばれた団塊の世代は日本を経済大国に押し上げ、今、新しい社会を作る「プラチナ卵」としての活躍が期待される。そして、日本の高齢者の真心、寛容、叡智で、世界の人と人の心をつなぐ「仕合せ社会」を構築し、世界の新しい未来を作り出す。</p>
<p>[チーム2] 織田 佳明 関根 茂登子 田丸 義晃 鶴田 浩久 平間 久顕</p>	<p>資源・エネルギー活用 の規律による環境保 全</p>	<p>環境資本創造文明への転換</p>	<p>CO₂排出削減の必要性をはじめとする地球環境問題は、国境を越えて全世界で取り組むべき問題として認識されているものの、目先の利害が優先して既存の資源消費構造から抜けられず、未だにその解決へと向かう軌道に乗っていることは実感できない。</p> <p>当発表では、利用可能な地球資源の価値を表わす概念を「環境資本」と新たに定義した上で、これを最大化し、経済活動と環境保全を一体化することにより、自律的に地球環境問題の解決へと向かうことができる豊かな文明(環境資本創造文明)への転換を提唱する。</p> <p>産業革命以来続いてきた、地球環境の再生力を越えた生産・消費の構造から、生産・消費を上回る再生力を有する社会経済構造への転換を図るに当たって、鍵となるのは革新的な環境技術である。当発表では、実現すべき科学技術についてその課題や日本の強みも例示する。</p> <p>日本は先進的な科学技術に限らず、世界をリードしていくことができる強みを持っている。変革を先導することで、日本のプレゼンスを高めつつ更なる成長を目指し、ひいては、その先に実現する地球規模での繁栄を世界の人々と共有したい。</p>



<p>[チーム4] 今村 智 臼井 元章 中野 恵 福田 一徳 山口 一喜 山田 光一</p>	<p>多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立</p>	<p>小さくなり過ぎた地球を救え ～「公共」の再構築と「欲望」の制御を柱に～</p>	<p>地球上の行動主体(個人、団体、企業、国家など)の経済活動が巨大化し、既存の社会原理がうまく機能しなくなった結果、我々の住む地球・世界が相対的に小さくなり、各行動主体が引き起こす問題を解決しえなくなっている。</p> <p>かかる状況下、「『公共』の再構築」と「『欲望』の制御」を二つの柱に据えて、共通行動規範を確立する事で、小さくなった地球・世界を救う事を提案したい。</p> <p>「『公共』の再構築」の分野では、価値の複数性を条件として、共通の世界にそれぞれの仕方に関心を抱く人々の間に生成する開かれた言説の空間を創造する。</p> <p>さらに、「『欲望』の制御」の分野では、必ずしも適切に共有されている訳では無いブッダの教えを再発見し共有する事で、ブッダの教えが切り開く地平を現代社会に活用する事を提案する。</p>
<p>[チーム5] 後藤 孝浩 鶴田 靖人 徳高 康弘 中野 明彦 和久 俊雄</p>	<p>先端科学技術の効用と新世界観の形成</p>	<p>自律的な循環を市民が支える科学技術システムのリ・デザイン</p>	<p>わが国は、経済大国と言われながら、ビジネスモデルの変革や学の知恵と産の技術の融合など、イノベーション創出に向けた取り組みに遅れ、長期に亘る経済低迷もあって、自らの国に誇りと自信を持てずにいる状態が続いている。</p> <p>チーム5では、こうしたわが国の科学・技術を取り巻く環境について、各種データや諸外国との比較を交えて分析し、日本が直面している中核課題の抽出を試みる。</p> <p>その上で、課題解決に向けたソリューション・スペースを提示するとともに、人と資金が自律的に循環し、それを市民が支える科学技術システムの再構築に向けて、あり得べき仮説解を議論する。</p>